
吸血鬼

廃人亭

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

吸血鬼

【Nコード】

N7211M

【作者名】

廃人亭

【あらすじ】

そこには吸血鬼の姉妹がいた。妹は躁鬱の気が激しく、情緒不安定である。それ故姉は、妹を長く幽閉し、妹が躁鬱を克服すること待った。

長い時が経ち、姉は妹を自由にさせ、経過を見守ることにした。しかし妹は躁鬱を完全に克服出来ておらず、躁の気が強くなった時、大きな問題を起こしてしまい、再度幽閉されることとなる。

地下室に閉じ込められた妹は、それを恨みに感じ、姉への報復を決意する。いよいよ地上へと開放されたとき、果たして姉妹の運命

はどのようなのか。

井伏鱒二の『山椒魚』をオマージュした、東方二次創作小説。

フランドール・スカーレットは悲しんだ。

彼女は495年の幽閉を経て、館の中を自由に行動する権利を得た。しかしそれは、仮の権利に過ぎなかった。激しい躁鬱の病を持つ彼女が問題を起こさず、紅魔館の一員として生活を送れるかどうかを試されているに過ぎなかった。ただしその試みは、たぶんに期待を込められたものではあったが。

結局、フランドール・スカーレットは再度幽閉されることになった。激しい躁の病が彼女を駆り立てたのだ。レミリア・スカーレットは、妹に自由を与えるのは時期尚早であったことを認めざるを得なかった。忸怩たる思いで、レミリアはフランドールを再度地下へと閉じ込めた。躁の反動として来る激しい鬱状態にあった妹は、反発することなく地下へと戻っていった。

「ちくしょう！！てめえ、ぶつころしてやる！！」

フランドールは地下で叫んだ。

「どいつもこいつも、ふざけた真似をしやがって！！ころす！！ころしてやる！！てめえらがそのつもりなら、私にだって覚悟があるぞ！！」

「どいつやこいつ」が誰を指しているのか、フランドール自体がよくわかっていなかったし、覚悟というものが何を指すのかもまた不明だった。ただ漫然とした不満と、うちから湧き出る躁の気とが彼女をして咆哮させしめるのであった。

「……ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい……」

躁の気が過ぎれば、鬱に悩まされるのが彼女の常であった。再度幽閉されたことがよほどショックだったのだろう。これほどに気が振れたのは数十年来のことだ。彼女は何かに対して一心に謝り、侘びとして自らの体を傷つけるのが常であった。既に彼女の両手からは肉が削げ落ち、骨が見えるまでになっていた。

「……そういえば、なんで私、また地下にいるのかな？」

フランドールがそう疑問に思ったのは、幽閉されて一月後のことであった。そしてその所以を思い出すまでに丸一日が経過していた。

「そっか……またあばれちゃったのか、私……」

フランドールは自分を情けなく思い意気消沈したが、意外なほどに淡々と事実を受け入れていた。後悔はあったが、かといって彼女自身、躁の気を抑えきれないことがよくわかっていたため、どうしようもないという諦観があった。ただ残念だという気持ちは強くあったため、無気力になってしまっていた。それ故、フランドールは何もせずにただ呆けるだけの日々を過ごすのであった。

「暇だなあ……ああ、暇だ……ちくしょう、暇だよ……うつつ、くそ、暇だ！！暇だ！！暇だ！！！！」

躁鬱がずいぶん落ち着き、ただ呆けるだけの日々を過ごして一月が経ったころ、フランドールは流石に暇を持て余し始めていた。暇を自覚すると、今まではなんともなかったというのに、とたんに暇

が耐えがたく思えてくるものだ。もともと情緒不安定な彼女であるから、フラストレーションの高まり方は急激であった。

そんな時、彼女が思い起こしたのは館での自由な生活であった。少し前までは、何か暇をすれば妖精メイドの仕事を遠くから眺め観察したり、彼女たちのおしゃべりに聞き耳を立ててみたりして時間を潰すことが出来た。あるいは図書館に行き、何か御本を読んで欲しいと頼むことも出来た。いや、そんなことをしなくとも、自分の部屋で人形遊びをしているだけでも十分楽しかったのである。自由な生活を思い出すと、いつそう現状への不満は高まっていくなのだった。

「ついこの間まで、この世界は広大だった。そしてあらゆるものが幸福で満ち溢れていた。全てが躍動していた。それがどうだ！！今、ここには動くものは自分よりほかにない。発せられる音は、鼓動と呼吸よりほかにあるのは慟哭だけだ。それ故に人形がいくらあるうとも時間を潰す道具には成り得ない！！むしろそれは、過去を思い起こさせるが故に私を苦しめるだけだ！！そうだ、人形だけではない。無駄に広いこの地下室は、逆に私を寂しくさせる。無駄に揃えられた家具は、まるで嫌味に思える。本も人形もお菓子も、私の心は満たされないという事実を突きつけるから冷淡だ。ああ！！つらい！！たまらなくつらい！！地上に出してくれ！！お屋敷で住まわせてくれ！！それだけで、この人形たちは、私をあざけ笑う悪魔の手先から、私とともに笑ってくれる素敵なお友達になるんだ！！だからお願い、私を出して！！お願い……お願い……」

散々に泣き腫らしたフランドールは、しばらく無気力になって呆けていた。地下での生活は時間の感覚を狂わせるため、果たしてどのくらいの時間が経ったのか分からない。少なくとも一週間ほどに

なることは確かだった。それだけの時間、フランドールが無気力であり続けたのは、彼女を刺激するものが何もなかったからである。

最も、刺激のない空間でフランドールを落ち着かせようという姉の思慮があつて彼女は幽閉されているのだから、このように彼女が呆けることは当然の結果であつた。かつてのフランドールならば、一度呆けたならば、突発的な発作がおきるまではずっと呆けたつきりだった。しかし自由で幸福な世界を知り、感受性が豊かになったフランドールが、以前と同様である道理はなかった。彼女は外的な刺激に頼らずとも、自分自身で刺激を生み出すだけの経験と思考能力と情緒を得たからである。

「貴方、私が地下に来てからずっと私のことを見ているわね」

「……」

「それも、随分と蔑んだ目で見ているわ」

「……」

「貴方、私を愚かだと思っているの？それとも、哀れに思うの？」

「……」

「答えなさいよ」

「……」

「……」

「……」

「愚か者！！そうやって誰かを見下して、そのくせにそうかと問われたらだんまりを決め込むのね！！」

フランドールは人形を思いっきり地面に叩き付けて叫んだ。

「私はお前と違う。そうよ、お前みたいに思つてることを言おうともせず、実現しようともせず、ただ態度だけふてぶてしくって馬鹿にしたようなクズじゃないんだから。ええ、出て見せるわ。何とすれば、私には飛びつきりの力があるんだもの」

そう言ってフランドールは地下と地上を隔てる扉の前に向かうのだった。

フランドールの挑戦は失敗に終わった。どこにも目は見当たらず、彼女の力は発動しなかったのだ。また、どれほどの攻撃を行っても扉は壊れなかった。攻撃の度におきる大きな振動は、まるでフランドールに期待を抱かせて弄ぶかのようだった。またその余震は、今度こそはと期待を抱くフランドールを嘲り笑うかのようだった。その挑発にすっかり乗ってしまったフランドールは、神経を逆立て何度も扉を破壊しようと試みるのだったが、それらの試みは全て失敗に終わった。絶望に打ちひしがれたフランドールは、扉を前にしてただただ泣き叫ぶだけだった。

「ひどい、ひどいわ。ああ、サタン様、なんだって貴方は私をこんな不自由な心に生んだのですか？なんだって貴方は私に大きな力を与えたのですか？なんだって貴方は私に、一時でも自由を与えたのですか？こんなに心が不自由だから、私はこうやって地下に閉じ込められてしまう。こんなに大きな力を持っているから、自尊心ばかりは大きくなって、挫折が辛くてたまらなくなる。一度でも自由を知ってしまったから、今の境遇が辛くてたまらなくなる。何も与えてくださらなかったら、例え不自由な心でも、こんなに辛い気持ちにはならなかったに違いないのに。いえ、そもそも、私がまるで無能だったら、きっとクズなりに幸せであれたに違いないわ……」

そう言ってフランドールは泣き崩れたのだった。

悲嘆にくれるものの常として、彼女は鬱屈した気持ちを徐々に暴力的な感情へ転換し始めていた。はじめは元の生活（といっても、彼女の歴史を見れば元の生活は地下室での暮らしなのであるが）へ戻りたいという切望だったものが、懇願となり、段々と要求に変化したところで、そこには壁しかない。彼女の脅しを聞く耳を持ったものは、そこにはいないのだから、いくらすごんでみたところで全く意味がなかった。

「そうだ、あいつを同じ目に合わせてやろう！！」

暴力的な感情は、ついに報復を彼女に決心させた。しかしその報復は、はなはだ理不尽な報復である。彼女が地下に幽閉されているのは、彼女自身の躁の病が原因である。また、地下への幽閉は彼女が同意したことである。だがこのとき、彼女にとってそういった理屈はどうでもよくなっていた。暴力という行為は、しばしば理屈を無視して行われるものであるが、まさしく彼女の暴力は理屈を無視した激情の発露であった。それどころか、憎しみだとか怒りだとかといった感情にすら乏しかった。ただただ誰かを同じ目に合わせてやりたいという気持ちばかりが先走っていた。その発散対象が、自分の姉へと向けられていたことだけは道理に沿っていた。

フランドールは、どのようにしてレミリアへ復讐するかを考えた。前提として、この地下室から出なくてはならない。そのためには、地下室から出ることを許されなくてはならない。地下室から出してもらったためには、おとなしくしていなくてはならない。故にフランドールは、毎日を静かに過ごした。

それが三ヶ月ほど続いたとき、どうやら彼女の忍耐は報われたらしい。地下室へと誰かが入ってきた。

「フラン……こんにちは。フラン、ああ、そこにいたのね。おいで、私よ、パチュリーよ」

「パチエー！！ああ、パチエー！！」

フランドールはパチュリーの胸元に飛び込んだ。少し埃っぽい匂いが、無駄に清潔な地下室にあってはかえって温かく感じた。

「パチエ、出して！！お願い出して！！寂しくってたまらないの！！また図書館で御本を読んで！！毎日、パチエにそうやって貰うことを考えなかったことなんてないわ！！」

「ああ、かわいいフラン……なんてかわいいそうなの。こんなところにずっと一人ぼっちじゃ、私だって辛くてたまらないわ。それになんていじらしいことを言ってくれるの。そんなに甘えられたら、私、どうしたって貴方を一人にしておけないわ」

フランドールの言葉を悪魔の計画と疑う無かれ！！またパチュリーを悪魔の言葉に騙される愚か者と思う無かれ！！フランドールは人を狡猾に騙すほど成熟してはいないのだから。またパチュリーは、邪な気持ちを看破出来ぬほど未熟ではないのだから。事実フランドールは本心から寂寞を感じていたし、パチュリーに本を読んでもらうことを切望して止まなかったのだし、パチュリーは、その気持ちが痛いほど理解できたからこそ同情したのだから。

パチュリーからフランドールの話を聞かされたレミリアは、胸が詰まる思いだった。姉が実の妹をかわいく思わない道理はなかった。パチュリーからフランドールに再度自由を与えるよう懇願されたレミリアは、もはやこれ以上妹を地下に幽閉しておくことは出来なかった。レミリアは咲夜とパチュリーに、月の力の弱まるころ、日の

力の強いときを選んでフランドールを幽閉から解くよう命じた。

「お嬢様、先ほどフランドールお嬢様の幽閉が解かれました。今はパチュリー様と一緒にご入浴遊ばれております。落ち着いたご様子でしたので、ご心配には至らぬものと存じ上げます」

咲夜からの報告をレミリアは、色に出さずとも喜んで聞いていた。

「そう。それはよかったわ。安心したわ」

そう答えると、レミリアはベランダへと足を運んだ。今日は何時にもまして日の力が強い。このベランダは、今の時間は日陰になっているため直接日を受けないのだが、それでも日を受けた空気が肌に触れるたび、肺に入ってくるたびに、レミリアは焼けるような熱さを感じていた。

「咲夜、日傘を用意して」

「かしこまりました。大き目の日傘をご用意いたします」

「いえ、小さいものを。出来れば、一番小さいものを用意して頂戴」

「……かしこまりました。それでは、折りたたみ傘をお持ちいたします」

主の提案には疑問を感じたが、それが命令に従わぬ理由にはなり得ないことをメイドは十分心得ていた。吸血鬼の館故、この屋敷は各階のパントリーに日傘を置いている。しかしそれらは概ね大きめの日傘であり、折りたたみの傘は1階にしか置いていなかった。止

むを得ずメイドは、1階にまで降り、日傘を取りに行くのであった。

レミリア・スカーレットは憂いを帯びていた。妹が仮初の自由を得たことは、妹が本質的に不自由であることの証拠であり、それをレミリアは悲しく思っていた。同時にレミリアは遺憾だった。姉として、当主として、妹を保護し、教育し、幸福にする責任があると彼女は思っていたからだ。そして彼女は、それを果たせていないことを痛感していた。だから、この日彼女が一人で外を歩こうと思ったのは、気晴らしではなく叱責のためであった。

「お嬢様、日傘をお持ちいたしました」

5分ほど経って、従者が戻ってきた。流石に4階から1階までを往復するのには時間がかかったようだ。また、この当主は常に美を尊ぶ。それ故、数少ない折りたたみの日傘の中から、彼女の美になう1本を選ばなくてはならず、それに少し時間がかかったのだった。

この日従者が選んだ日傘は、白を貴重としたクラシックで凝ったデザインの無い質素なものであった。

「ありがとう、咲夜。それでは、少し外に出てくるわ」

そう言ってレミリアが部屋を出ようとしたとき、勢い良くドアは開かれた。そこには、フランドールの姿があった。

「フラン？あなた、どうし……」

「うおおおおおおおおおおおおお！！！！」

フランドールは雄たけびをあげながらレミリアに突撃した。そし

て姉の体をがちりと掴み、歪んだ弾丸となつて外へと飛び出した。

「うあああああああ！レミリアアアアアア！！」

弾丸は紅く焼け、煙を巻き上げながら幻想郷の空を舞った。高く舞い上がって雲を裂き、低く滑空しながら木々をなぎ払い、如何な障害物もその道を遮ることは出来ないようだった。

「うおおおおお！！うおおおおお！！うおおおおお！！うおおおおお！！うおおおおお！！」

はじめは姉の名前を呼び続けていたフランドールだが、次第に対象は曖昧になり、今ではただ叫び続けるだけとなった。暴力は次第に発散すべき対象をあやふやにし、無秩序に拡大する性質を持っているが、まさしくフランドールの暴力はそれである。今仮に、レミリアがうまくフランドールの魔手から逃げおおせたとしても、フランドールは慣性に逆らってまで姉を追わないであろう。そのような状況であるから、レミリアにとっては今が逃げおおせる好機なのであるが、彼女はいつこうそのつもりがないかのように、ただただ妹のたぎりを身に受けていた。

灼熱は身を焦がすのみではない。その焼きついた空気は肺から吸血鬼の内臓を焼き焦がし、致命的な損傷を与える。通常は膨大な魔力と尋常ならざる再生力でもってして無効化するそれら太陽の災いは、今や明らかに吸血鬼という種の強さを超えて二人に降りかかっている。それは忘我の怒りに身を任せきっているフランドールですらハッキリと自覚するところであった。レミリアは当然自覚していた。それにも関わらず、この呪縛から姉妹は逃れようとしなかった。

どれだけの時間が経つたろうか。もはやレミリアもフランドール

も、お互いに意識を保つことが困難になって来た。今や二人は、慣性に従って未踏の大地を突き進んでいるだけであつた。そこは人も妖怪も、動物ですらいるのかいないのか良く分からない、陰樹の濃い不気味に静かな森であつた。不幸か幸いか、二人は木の上を飛んでいたため、レミリアは眼前に迫る広大な池の存在を発見することが出来た。

「フランドール、お聞きなさい」

姉は至つて落ち着いた口調だつた。

「このまま進めば、私たちは水を渡ることになるわ。この上流水の呪縛を受ければ、私たちはいいよいよその命を失わなくてはならなくなる。あなたがどんなつもりかは私には分からないわ。でもなんにせよ、お互い死んでしまつては意味がないではないの。だから、私のためではなくってあなたのためにも、その怒りを一時静めなさい」

姉の提案は、実に理にかなつたものだつた。それが、妹の感情を逆撫でした。

「お利口なこと言つてんじゃねえよ、ばかやろう!!」

フランドールはただ惰性で掴むだけになつていた両腕に出来る限りの力を入れなおした。

「死んだつて意味はある!!死んだら価値を失うだけで、意味はあるんだ。だから、死んでもいい。死んでもいいから、私はあんなに私と同じ目にあわせてやりたいんだ。私と一緒に、苦しみを与えてやりたいんだよ!!」

妥協の無さが衝動の証明であるから、フランドールの報復は衝動に違いない。だがその衝動は、長い時間をかけて陰湿に変容した報復だった。それ故、彼女の報復はしばしば対象と目的をあやふやにするのだった。それが報復対象からの冷静で理知的な提案によって再度存在意義を認識しなおすことになったのは実に皮肉なことである。激情は冷静さに反発するものだから、彼女の衝動は激情を備えているのであろう。

「フランドール……わかったわ。それならば、私からは何も言うことはない」

姉は妹の全てを受け止める覚悟を決めたのだった。

妹が力尽き、高度を下げ始めた時、とこいつにはあまじにもたすけであるが中島を発見できたのは幸いであつた。姉は最後の力を振り絞り、なんとか妹と二人、着陸することが出来た。中島に着くと、姉は日傘を差し、妹が日にあたらないようにすむようにした。この時姉は、既に死を悟っていた。

日が沈み、月が顔を出す頃、フランドールは意識を取り戻した。そしてあたりを見回し、現状を把握すると、高らかに笑って姉に話しかけた。

「あつはつはつは。レミリア、ついに私と同じ目にあわせてやつたぞ！！吸血鬼なんて不便なものよね！！家を離れてしまつては、太陽や水が自然の監獄となつて貴方を閉じ込めるのだもの！！でも、なにこれ？こんな都合の良いところへとたどり着くなんて思っていなかったわ。あははは、ねえ、どんなきもち？どんなきもち？」

痛快に笑うフランドールに対して、レミリアは淡々と答えてこう言った。

「……満足したかい？」

レミリアの冷静さがフランドールの激情に再度火をつけた。

「ええ、満足よ。なんでも良いから、あんたを同じ目に合わせて、あんたを苦しめてやりたかったんだから。でも、最後、おまえを屈服させない限りは、私は心から満足することはできないね」

「それは無理ね」

レミリアはやはり、淡々と答えた。

「レミリア・スカーレットは何者にも屈しない」

「それじゃ、私があんたを屈服させる最初の一人ね！！」

それっきり、姉妹は話をしなくなった。

姉妹が池の中に閉じ込められてから四日が過ぎた。レミリアは昼も夜も、深く穏やかな呼吸で目を瞑り、体力を消耗しないよう努めていた。フランドールは、日中日傘の影で横になり、夜は自由に寝返りをうちながらやはり横になっていた。この島中にあつては、何もやることがないのだから、ただ体力温存に努める他にはない。そうは言っても、どうしたって退屈であるから、フランドールは様々な考え事をして気をまぎわらせていた。やはり思い出すのは、館での自由な時間である。たわいない妖精メイドの会話、噂の類を思い起こしたり、パチュリーに読んでもらった御本のことを思い出したりしていた。

それにも飽きてきた頃、フランドールはなんとなく、横で木にも

たれ掛かって寝ているレミリアを見ていた。最初はただぼうつとして姉の顔を眺めているだけだったのだが、次第に視線を下へ向けていき、ゆっくりと上下する胸、あちこち破けてぼろぼろになった服を見るようになった。それも特に意味があることではなかった。しかしながら、そうやって眺めていると、姉の体が妙に綺麗なことに気がついた。魔力を使い切ったフランドールの肌には、あちこちに黒点が浮かび上がっている。太陽に焼かれた肌を再生する十分な魔力がないのだ。力のほとんどは、内蔵機能の維持に当てており、今は決して人に見せられる姿を維持することが出来てはいない。それがどうだろうか。彼女の姉は、相変わらず落ち着いた様子で、汚い池の中島で、しかもぼろを着ていると言うのに美しい。フランドールは、ぼうつとしてその姿に見とれていた。そしてぼそつと言った。

「なんでそんなに余裕なの？」

「……強がっているだけよ」

フランドールは、まず姉が起きていることに驚いた。姉が眠っていると思ったからこそその独り言だったからである。また答えの意外なことに驚いた。自分とは違う世界の存在であるかのように思っていた姉が、思ったよりは近い存在であるように感じた。

それから、またお互いに会話はなくなった。

さらに一週間が過ぎた。この一週間お互いに会話はなかった。またお互いにやることも変わらなかった。だがフランドールは、自由であった頃の生活を思い出すよりも、ただ姉の顔を見続けている時間が長くなっていた。今日もまた、何をするわけでもなく、フランドールはずっと姉の顔を見ていた。そのとき、姉が確かに、大きな溜息をつくところをフランドールは見逃さなかった。

「いま、大きな溜息をついたわよね？」

フランドールは、姉を見上げ、かつ親しみを込めて言った。

レミリアは、相変わらず落ち着いた様子で答えた。

「それが、どうかしたのかしら？」

「そんな答え方はないわ」

「悪かったわ」

「ねえ、お姉さま」

「何かしら？」

「私、お姉さまに、私と同じ目にあわせてやりたかっただけなの」
「そう」

「だから、別に嫌ってなんかないのよ」

「そう」

「さっきから、気のない返事ばかりよ。そんなの嫌よ」

「ごめんなさい。でも、私、もうダメよ」

「……死んじゃうの？」

「そうみたいね」

しばらくして、レミリアは優しい笑みを携えて妹に話しかけた。

「フランドール……」

「何、お姉さま」

「私も、貴方のこと嫌いじゃないわよ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7211m/>

吸血鬼

2010年10月8日14時09分発行